

令和7年度 全国学力・学習状況調査の 結果等について

1-1 令和7年度 全国学力・学習状況調査の概要

全国学力・学習状況調査は、義務教育の機会均等とその維持向上の観点から、

- ・全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ・学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

ことを目的として実施している調査です。

令和7年度調査は、小学校6年生、中学校3年生を対象として、国語、算数・数学、理科を実施しました。理科(中学校)、児童質問調査(小学校)、生徒質問調査(中学校)は、オンラインによるCBT方式で実施しました。

1-2 調査結果の取扱いの 改善の方向性

「全国的な学力調査に関する専門家会議」およびその下に設置した「調査結果の取扱い検討ワーキンググループ」において、「全国学力・学習状況調査の調査結果の取扱いの改善の方向性」(令和7年6月6日)が取りまとめられ、今後の全国学力・学習状況調査の調査結果について、児童生徒の学習成果や課題がわかるような示し方に改善することや、都道府県・指定都市別結果につい

ては平均正答率の公表に加えて箱ひげ図や散布図も用いて調査結果を多面的に解釈できる示し方に改善すべきであること等が示されました。

これを受けて、令和7年7月14日、調査結果を学校に提供するとともに、正答率などの全国平均や、今回初めてデータを収集した不登校児童生徒の参加状況などを公表しました。平成19年度の調査開始以来初めて、学校現場からの要望に応じて、夏休み前に結果を提供しました。令和7年7月31日には、令和7年度調査の全国データに基づく分析結果を公表しました。さらに、令和7年秋頃を目途に、都道府県・指定都市別データに基づく分析結果を公表予定です。

1-3 令和7年度調査 教科調査の結果(国語)

国語の調査結果においては、

- ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けること
- ・自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと

に課題が見られました。

例えば、**小学校国語**では、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。

言葉の変化について自分が納得したことを、次の条

件に合わせて書く。

条件1：納得したことを【資料1】から言葉や文を取り上げて書くこと。

条件2：納得した理由を【資料2】、【資料3】、【資料4】の中から選び、言葉や文を取り上げて書くこと。

この問題では、条件1・2を満たして書かれた以下のような例が正答となります。

言葉は年月とともに変化するという事になったくしました。なぜなら、「新しい」という言葉が、奈良時代には「あらたし」と言われていたように、時代とともに言葉の形が変わることがあるからです。

しかし、以下の誤答のように、納得したことは書いたものの、納得した理由を複数の資料から取り上げて書けず、条件2を満たせなかった児童が見受けられました。

言葉の広がりや深さにも、ふれていただきたいということになったくしました。これからも言葉を大切にしたいと思います。

また、**中学校国語**では、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。

【ちらし】に小学生の感想をもとに今年の美術展で工夫したことを書き加える。

条件1：今年の美術展の【工夫】と、【工夫】と結び付く小学生の【感想の一部】を選択する。

条件2：1で選んだ【工夫】と【感想の一部】との関係が分かるように、接続する語句や指示する語句を用いて書く。

この問題では、条件1・2を満たして書かれた以下のよ

うな例が正答となります。

昨年の来場者から、どうやって作品を作ったのか知りたくなったという感想をもらいました。そこで、今年は中学生が作品について説明します。気になる作品があったら、ぜひ中学生に質問してください。

しかし、以下の誤答のように、伝えたい事柄とその根拠を適切に結び付けながら、自分の考えが伝わる文章になるように書くことなどに課題がある生徒が見受けられました。

今年の美術展では、中学生が作品について説明します。昨年参加した小学生の感想に、いろいろな作品が展示されていて楽しかったという声がありました。

以上のような調査結果を踏まえると、国語の指導においては、文章を読む目的を明確にして必要な情報を捉えること、伝えたいことの根拠を明確にして書くことを意識させることが重要と言えます。

1-4 令和7年度調査 教科調査の結果(算数・数学)

算数・数学の調査結果においては、

- ・数直線上の分数を捉えることや、百分率を倍を使って捉え直し表現すること
- ・あらかじめ書かれている図形の証明を評価・改善すること

に課題が見られました。

例えば、**小学校算数**では、数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。

数直線上にア、イで示された数を分数で書く。



正答は、以下のとおりです。

$$\text{ア} : \frac{1}{3} \quad \text{イ} : \frac{5}{3} \text{又は} 1\frac{2}{3}$$

しかし、以下の誤答のように、数直線上に示された1より大きい数を、1より大きい分数として捉えて表すことができていない児童が見受けられました。

$$\text{イを} \frac{5}{6} \text{又は} \frac{2}{3} \text{と解答}$$

また、「10%増量」の意味を解釈し、「増加後の量」が「増加前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。

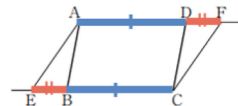
10%増量のつめかえ用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選択する。

正答は、「1.1倍」です。しかし、「10%増量」が増加前の量の1.1倍になっていることだと解釈できていない児童が見受けられ、「0.1倍」「10倍」等の誤答が見受けられました。

中学校数学では、統合的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。

四角形 AECF は平行四辺形となることの証明のうち、変更が必要な部分を選択し、書き直す。

図2



ア	平行四辺形の向かい合う辺は平行だから、 $AD \parallel BC$ よって、 $AF \parallel EC$①
イ	平行四辺形の向かい合う辺は等しいから、 $AD = BC$②
ウ	仮定より、 $DF = BE$③
エ	②、③より、 $AD - DF = BC - BE$④
オ	④より、 $AF = EC$⑤
	①、⑤より、 1組の向かい合う辺が平行でその長さが等しいから、 四角形 AECF は平行四辺形である。

この問題では、「エ」を選択し以下のように書き直すことができなければ正答となります。

(誤) $AD - DF = BC - BE$ (正) $AD + DF = BC + BE$

しかし、既に書かれている証明が適切かどうかを評価できない生徒が見受けられ、「エ」を選択したものの書き直すことができていなかったり、他の選択肢を選択したり、といった誤答が見受けられました。

以上のような調査結果を踏まえると、基準となる数を見だし数量の関係を捉えさせることや、数学的な用語や表現について知識の習得と習得した知識を活用する活動を行き来しながら理解を深めていくことが重要と言えます。

1-5

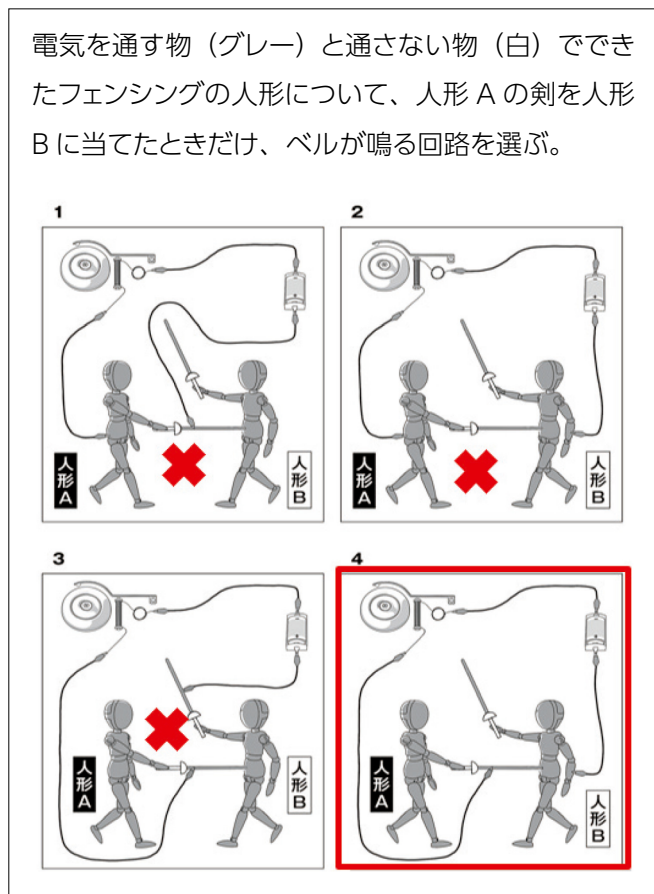
令和7年度調査 教科調査の結果(理科)

理科の調査結果においては、

- 電気が通る回路を実際の生活の中でつくること

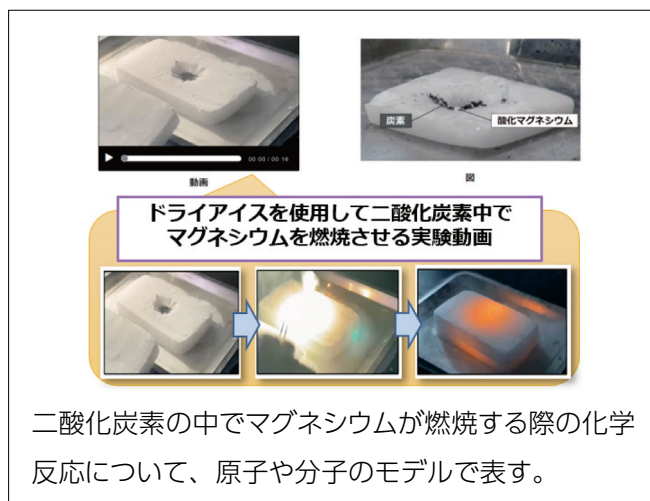
・化学変化を原子や分子のモデルで表すこと
に課題が見られました。

例えば、**小学校理科**では、電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。

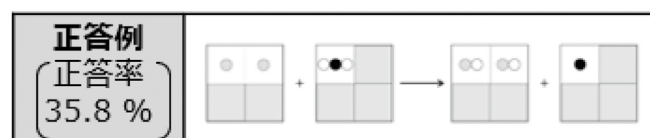


正答は、「4」です。しかし、電気が通る回路のつくり方に関して理解、表現できていない児童が見受けられました。

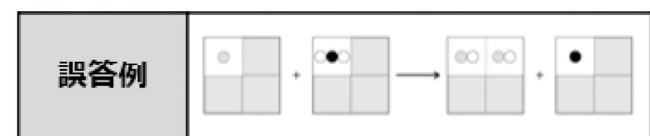
中学校理科では、化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができるかどうかをみる問題として、以下のような問題を出題しました。



正答は、以下のとおりです。



しかし、以下のように、化学変化で生じている反応について十分に理解していない生徒が見受けられ、以下のような誤答が見受けられました。



以上のような調査結果を踏まえると、問題解決や科学的な探究のプロセスを通して、学習を通して身に付けた知識を活用することができるような指導の充実が重要と言えます。

1-6 質問調査の結果

1-6-1 学習指導要領の趣旨を踏まえた教育活動の取組状況

まず、約8割の児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだと考えており、「主体的・対話的で深い

学び」に取り組んだと考える児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られました。また、児童生徒の主体的・対話的で深い学びに関する回答と児童生徒のウェルビーイングに関する回答との間には相関が見られました。

また、家庭の社会経済的背景（SES:Socio-Economic Status）が低いグループほど、各教科の正答率・スコアが低い傾向が見られます。しかし、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んだ児童生徒は、SES が低い状況にあっても、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られました。

さらに、約7割～8割の児童生徒が主体的に学習を調整できていると考えており、主体的に学習を調整できていると考える児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られました。

1-6-2 ICT を活用した学習状況

ICT 機器の活用については、「ほぼ毎日（1日に複数の授業）」「ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）」「週3回以上」活用する学校が増え、小学校 97%、中学校 94% となりました。また、児童生徒の ICT 機器を使用する頻度と各教科の正答率・スコアとの間に、一定の関係が見られました。また、ICT 機器が、不登校児童生徒、特別な支援を要する児童生徒、外国人児童生徒等に対する学習活動等の支援や、児童生徒の心身の状況の把握等にも活用されていることが明らかになりました。

次に、約8割の児童生徒が ICT 機器で「文章を作成する（文字、コメントを書くなど）」ことができる、約9割の児童生徒が「インターネットを使って情報を収集する（検索する、調べるなど）」ことができると考えていました。また、ICT 機器を活用する自信がある児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している傾向や、各教科で自分の考えを工夫してまとめたり発表したりする活動に取り組んでいた傾向、「自分にはよいところがあると思う」と回答している傾向が見られました。

さらに、約9割の児童生徒が、ICT 機器について「分か

らないことがあった時に、すぐ調べることができる」「画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる」「友達と協力しながら学習を進めることができる」と考えていました。また、ICT 機器活用の効力感に関して肯定的に回答した児童生徒ほど、自分と違う意見や新たな考えについて考えることに前向きな傾向が見られました。

1-6-3 教科に関する意識や学習活動

各教科の授業がよく分かると回答した児童生徒ほど各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られましたが、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が全教科で前回調査から減少しました。また、各教科への興味・関心に関する項目として、国語、算数・数学、理科の各教科が好きかどうか、役に立つと思うかどうか、得意かどうか、という質問を盛り込みました。国語、数学、理科をそれぞれ得意でないと考えている中学校生徒は約5割でした。

また、今年度から、男女別の分析結果も公表しました。男女別に平均正答率・スコアを比較すると、国語、理科は小・中学校とも女子が男子を上回りました。算数・数学は小・中学校とも男子が女子を上回りました。ただし、算数・数学、理科については、大きな男女差は見られませんでした。

各教科の授業で学習したことが「将来、社会に出たときに役に立つ」という意識は、いずれの教科においても大きな男女差は見られませんでした。一方、算数・数学、理科については、平均正答率・スコアの男女差が見られないにも関わらず、「好き」「授業の内容がよく分かる」「得意」と回答する割合は、女子が男子を下回りました。平均正答率・スコアが女子の方が高い国語については、「好き」「授業の内容がよく分かる」「得意」と回答する割合は、女子が男子を上回りました。

次に、各教科において、読んで理解する学習活動を実施している児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られ、特に、「文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、かかれていることを理解することができる」の回答状況と中学校数学の正答率との高い相関が見

られました。また、読書が好きな児童生徒ほど各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られましたが、そのような児童生徒の割合が減少している傾向も見られました。

1-6-4 児童生徒のウェルビーイングに関する状況

「自分には、よいところがあると思う」と回答した児童生徒、「先生がよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒はいずれも増加し、約9割でした。また、「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいあるか」の質問に肯定的に回答した児童生徒も増加し、約9割でした。

1-6-5 学校外での学習状況

学校の授業時間以外における児童生徒の勉強時間は、小学校・中学校とも、令和3年度以降、平日・休日いずれも減少傾向となっています。学習塾や家庭教師による学習状況は横ばいでした。

2-1

令和6年度 経年変化分析調査・保護者に対する 調査の概要

令和6年度全国学力・学習状況調査のうち、令和6年5月から6月にかけて実施した経年変化分析調査・保護者に対する調査の結果について、令和7年7月31日に公表しました。

経年変化分析調査は、全国的な学力の状況について、経年の変化を把握・分析し、今後の教育施策の検証・改善に役立てるため、国・公・私立の小学校6年生・中学校3年生の抽出された児童生徒を対象に行う調査です。国語、算数・数学、英語（英語は中学校のみ）について、調査を実施しました。

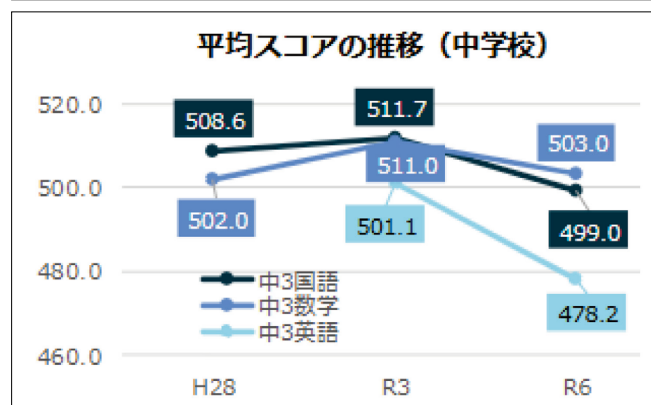
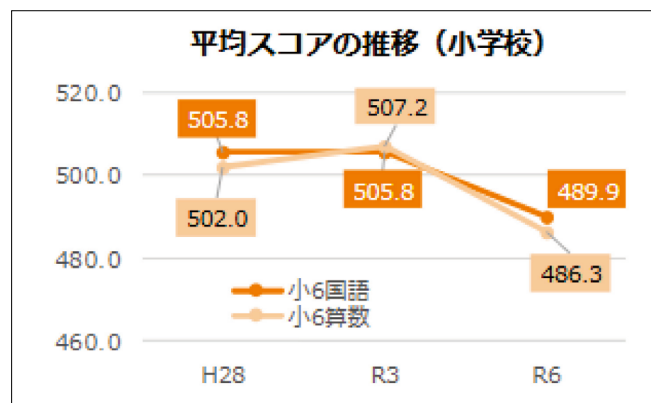
保護者に対する調査は、家庭状況と学力等の関係について経年の変化を把握・分析し、今後の教育施策の検証・改善に役立てるため、経年変化分析調査を実施した児童生徒の保護者を対象に行う調査です。児童生徒の家庭に

おける状況、教育に関する考え方等に関する質問調査を実施しました。

2-2

令和6年度 経年変化分析調査の結果

平成28年度、令和3年度、令和6年度（PBT 実施校）の結果を比較したところ、小学校国語・算数、中学校国語・英語について、スコアの低下が見られました。中学校数学については、スコアの変化は見られませんでした。また、SES が低い層の方がスコアの低下が大きい状況が確認されました（中学校英語を除く。）。



ただし、全国の本調査のスコア分布の状況に関する変化の有無は中長期的に継続して分析する必要があり、次回（令和9年度予定）以降の結果もあわせて引き続き分析してまいります。

2-3 令和6年度 保護者に対する調査の結果

児童生徒の学校外での過ごし方について、学校外での勉強時間は前回調査から減少しました。学校外での勉強時間が長いほど、経年変化分析調査のスコアが高い傾向が見られました。また、テレビゲームの使用時間は前回調査から増加しました。テレビゲームの使用時間が長いほど、経年変化分析調査のスコアが低い傾向も見られました。同様に、スマートフォンの使用時間も前回調査から増加しました。スマートフォンの使用時間が一定程度を超えると、経年変化分析調査のスコアが低下する傾向も見られました。

次に、児童生徒の学校外での過ごし方に影響を与えている可能性があるものについて分析しました。「子供と勉強の話をする」という保護者の割合が減少しましたが、そのような保護者の子供の方が勉強時間が長い傾向が見られました。「学校生活が楽しければ良い成績を取ることはこたわない」という保護者の割合が増加しましたが、そのような保護者の子供の方が勉強時間が短い傾向も見られました。また、「ゲームの時間を限定している」という保護者の子供の方がテレビゲームの時間が短いこと、「スマホルールを守るよう促す」という保護者の子供の方がSNSや動画視聴の時間が短いこと、保護者のテレビゲーム、SNS・動画視聴の使用時間がそれぞれ長いと子供の使用時間も長い傾向が見られました。さらに、授業が「よく分かる」と回答している児童生徒の方が勉強時間が長く、テレビゲーム、SNS・動画視聴の時間が短い傾向が見られました。ただし、授業がよく分かる場合も分からない場合も、家で保護者と勉強の話をする児童生徒の勉強時間が長い傾向が見られました。

3 調査結果を踏まえた 教育委員会における取組の推進

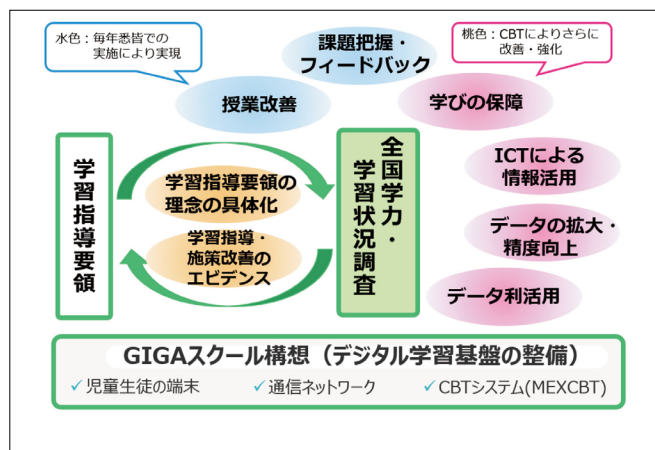
都道府県・指定都市教育委員会等に対して、「令和7

年度全国学力・学習状況調査の結果公表②及び調査結果の活用や取扱いについて（通知）」（令和7年8月8日付け7文科教第799号）および「令和6年度全国学力・学習状況調査経年変化分析調査及び保護者に対する調査の結果について（通知）」（令和7年8月8日付け7文科教第800号）を発出し、これらの調査結果の分析・検証の結果を踏まえ、それぞれの役割と責任に応じて、改善計画等の作成を行うことなどにより、域内の教育や教育施策の改善に向けて総合的かつ計画的な取組を進めることを要請しました。

4 調査のCBT化と これからの全国学力・学習状況調査

全国学力・学習状況調査は、令和9年度以降、CBTに全面移行する予定です。CBTやIRT（項目反応理論）の導入によって、児童生徒一人一人の学習指導の充実に向けた、全国学力・学習状況調査の活用の可能性が広がります。文部科学省は、これからの全国学力・学習状況調査によって我が国の学力水準の維持・向上を図ってまいります。

今後のCBT化の工程表(案)			
		令和8年度	令和9年度
教科調査	小学校	国語	PBT
		算数	サンプル問題による準備
		理科	PBT
	中学校	国語	PBT
		数学	サンプル問題による準備
		理科	PBT
		英語	CBT
	質問調査	児童生徒	CBT
		学校	オンライン方式



- 令和6年度全国学力・学習状況調査経年変化分析調査及び保護者に対する調査の結果について(通知)(令和7年8月8日)

https://www.mext.go.jp/content/20250812-mxt_chousa02-000030972.pdf

- 全国学力・学習状況調査へのCBTやIRTの導入について(令和6年10月25日教育課程部会資料)

https://www.mext.go.jp/content/20241025-mxt_kyoiku01-000038590-01.pdf

5 調査結果の詳細等

- 令和7年度全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果資料

<https://www.nier.go.jp/25chousakekkahoukoku/index.html>

- 令和6年度経年変化分析調査・保護者に対する調査調査結果資料

https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/kannren_chousa/keinen_hogoshu_chousa.html

- 令和7年度全国学力・学習状況調査の調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実に向けた説明会

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/setsumeikai/r07setsumeikai/index.html>

- 全国学力・学習状況調査の調査結果の取扱いの改善の方向性(令和7年6月6日)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/1421443_00007.htm

- 令和7年度全国学力・学習状況調査の結果公表②及び調査結果の活用や取扱いについて(通知)(令和7年8月8日)

https://www.mext.go.jp/content/20250812-mxt_chousa02-000036913.pdf